

NHK「おはよう日本」の特集への取材協力をしました

2014年12月19日、NHK朝のニュース番組「おはよう日本」にて、メリジャパンが取材協力した「医師の手術技能向上のための取り組み」が放映されました。

番組では、メリジャパン常務理事である蜂谷裕道先生のインタビューと、蜂谷先生が実際に執刀する傷口の小さい方法での脊椎手術を紹介。冒頭のインタビューにて、蜂谷先生は、現在の傷口の小さい手術は見える範囲が小さいため、学びづらい手術方式であることを説明しました。



平成24年に「臨床医学の教育及び研究における死体解剖のガイドライン」が制定されたことをきっかけに全国の医・歯学部のある大学のいくつかで、ご遺体を用いてそれら

の手技を学ぶ医療技術トレーニングが実施されています。私たちが1月にトレーニングを開催した札幌医科大学もその一つです。今回の放送では、現在行われている模型やシミュレータなどを使用した医療技術トレーニングのご紹介とともに、愛媛大学で実施されたご遺体での手術手技実習の様子が放映されました。

実習に参加した脳神経外科の先生は「組織に触れるときの自分の力加減などは、経験しないといくら本で勉強してもわからない。今回の経験は、実際の手術の時にやっぱり生きてくると思う」と感想を語りました。

近年、手術の練習のためのシミュレータや模型も、より人体の構造に近いものが開発されています。高度な医療技術を安心して受けるために、さまざまな手術手技の練習方法が生まれ、その一つとしてキャダバートレーニングがより発展していくことを私たちは願ってやみません。

NHKの取材ディレクターさんからは「この取り組みを、より多くの人に誤解なきよう伝えたい」とのお言葉をいただきました。私たちがより多くの方々にキャダバートレーニングの必要性をご理解いただけるよう、今後も努力していきたいと思っております。

会員募集・ワンコイン募金のご案内

メリジャパンでは、私たちの趣旨にご賛同いただける方に会員登録・寄付などをお願いしております。詳細は、別紙案内書をご覧ください。

編集 後記

メリジャパンがNPOの認証を取得してから8年が経ちました。この間に、ご遺体を使っての手術手技研修に対する国及び学会の考え方は大きく変わり、定められた枠のなかではありますが、法に触れることなく行えるようになりました。今回メリジャパンでは、札幌医科大学の全面的なご協力のもと「脊椎MIS Cadaver Seminar」を開催することができました。気候的に厳しい時期にもかかわらず、全国から19名の整形外科の先生方に受講していただき、また講師を務めていただいた先生方には非常に熱心に指導をしていただきました。紙面をお借りして改めて御礼申し上げます。参加された先生方はみなさん学ぶ意欲にあふれ、充実したセミナーができたのではないかと思います。またアンケートを拝見しますとおおむね好評をいただけたと思っておりますが、今後の課題もいただきました。全国的に今後ますますこのようなセミナーが開催されていくことが予想され、メリジャパンでも医療発展の一助になるべく、より充実したセミナーを開催していくよう努めてまいります。今後とも変わらぬご支援をお願い申し上げます。(O)

●お問い合わせ先

特定非営利活動法人メリジャパン

〒464-0821 名古屋市千種区末盛通2-4 はちや整形外科病院内

電話052-751-8197 E-mail meri_info@hachiya.or.jp

URL <http://www.merijapan.org>

 **MERI Japan**

MERI Japan News

メリジャパンニュース
平成27年4月10日発行 VOL.8 no.1

The Human 識者に聞く

名古屋市昭和区にある名古屋第二赤十字病院の副院長であり、メリジャパンの理事も務める佐藤公治氏。今回、さまざまな立場から医師の手術手技の向上に尽力する同氏に、2009年に発起人の一人として立ち上げた「日本MIS研究会(※)」での取り組みや、名古屋市立大学に新設される「サージカル・トレーニングセンター(仮称)」の意義、そして同施設で開催予定のセミナーなどについて語っていただきました。

※「MIS(ミスト)」とは「Minimally Invasive Spine Stabilization(最小侵襲脊椎安定術)」の略で、同研究会ではMISの安全な普及をめざしています。

医師同士が本音で実経験を共有し合い、 トレーニングで技術を向上できる場を作る。

名古屋第二赤十字病院
副院長 兼 整形外科・脊椎脊髄外科部長

佐藤 公治

昭和58年国立徳島大学医学部卒。昭和59年に名古屋大学整形外科入局。平成元年名古屋大学医局に帰局し、脊椎・脊髄班に所属。平成9年同大学整形外科医局長、助教授を経て、平成11年より現職。



日本MIS研究会を立ち上げ 若手医師の育成に尽力

日本MIS研究会は、手技を学びたいという全国各地の若手医師の教育と、MISの安全な普及を目的に、私を含めた5名の医師が発起人となって設立しました。その後、主旨に賛同する各地の医師が加わり、現在では関東、中部、関西、中四国、九州に地方会が発足。若手医師を中心に本音で語り合う勉強会や症例検討会などを実施しています。

私の若かりし頃は、外科医の手術は、専門書で学んだり、先輩の手技を見て覚えるものでした。ただ、内視鏡を用いる低侵襲手術は、見て覚えろと言われても感覚がつかめません。だからこそ、日本MIS研究会のような学びの場がとても重要です。上手くいかなかった部分や、こうすればもっと良かったのではという反省を含めて、さまざまな医師の経験・事例を本音で語り合うことは、成功事例よりもむしろ多くの学びがあると思います。また、手術の感覚を養う意味で、キャダバ(ご遺体)を用いた手技の練習も非常に有意義だと考えています。

新たな取り組みが活動の輪を広げる

また、医師以外のコメディカルの教育も重要なポイントです。多職種が連携して行う手術の現場では、コメディカ

ルも大きな役割を果たします。そこで、3月21日の第3回中部MIS研究会では、看護師も対象にした手術手技セミナーを実施しました。このほか、参加者が講師の採点を行うことで指導の質の向上を図るとともに、若手の医師たちに実際のセミナーで講師役を務めてもらい、OJTを通じて教え方をレクチャーするなど、次を担う指導者の育成にも取り組んでいます。

現在、多くの医療機器メーカーが社会貢献の一環として、トレーニング施設の開設など、医師向けのエデュケーション部門を強化しています。メリジャパンやMIS研究会の活動に関しても、セミナーへの医療機器の貸与など、積極的にご協力いただいています。そうしたご協力なくして、今のような活動の広がりはありません。私たちは今後も企業と協同しながら、高度な医療技術の安全な普及を推進していきます。

新施設の開設によって 名古屋がトレーニングのメッカに

今年1月には、札幌医科大学主催、メリジャパン共催で脊椎MIS Cadaver Seminarが行われました。セミナー自体は盛況に終わったものの、解剖実習室を使ってのセミナーだったので、セミナー現場の設備・環境が手術室として整っていない点が課題でした。今後は、手術手技の練習の場としての設備を充実させ、参加者の満足度を一層上げていきたいと思っております。

その点で、早ければ今年夏頃にも開設される名古屋市立大学の「サージカル・トレーニングセンター(仮称)」と、同施設で開催予定のセミナーには大きな期待を寄せています。無影灯や透視台なども準備され、手術室に近い環境の整備をめざしているようであり、名古屋がキャダバートレーニングのメッカとなる起爆剤になるのではと感じています。

脊椎MIS Cadaver Seminarが開催されました。

整形外科のスペシャリストである先生方の講義

真冬の寒さが厳しい1月23日(金)・24日(土)、札幌医科大学にて「脊椎MIS Cadaver Seminar」が開催されました。講師には整形外科分野でのスペシャリストである先生7名(うち2名はメリジャパン理事)をお招きし、全国各地から受講者として19名の整形外科の先生が参加されました。今回のセミナーは、札幌医科大学主催、メリジャパン共催で実施した、メリジャパンとして初めて企画・運営したキャダバーセミナーになります。



札幌医科大学倫理委員会承認セミナーにて撮影

1日目の23日は午後3時からセミナーを開始。冒頭メリジャパン常務理事より感謝の言葉が述べられ、続いて主催者である札幌医科大学解剖学講座および整形外科科学講座の先生のご挨拶、後援をいただいた団体主宰者のご挨拶があり、その後、受講者の自己紹介などが1時間にわたり行われました。休憩を挟んで後半は、講師の先生6名より「Cadaverをめぐる法律面の問題」(5分)、「本セミナーの意義」(10分)、そして4名の先生から順次脊椎外科における6術式の専門的な講義が90分行われ、午後6時過ぎに講義を終えました。終了後には、関係者全員が参加する懇親会が催され、1日目は和やかな雰囲気の中幕を閉じました。

MIS(ミスト 最小侵襲脊椎安定術)とは?

MISとは、脊椎(せぼね)に行う小さい傷口での手術のことです。老化が進むと、腰椎の骨が前後左右にずれ、中を通る神経を圧迫することがあります。神経が圧迫されると、腰痛や足のしびれが出たり、歩行困難になったりします。その際、神経への圧迫を取り除く手術の一つに、骨の位置を元に戻し金具で固定する方法があります。従来は傷口を10センチ程度開き、金具を入れていましたが、近年では小さな傷口から金具を入れることができる機器が開発され、患者さんの負担を軽減し治療できるようになりました。

小さい傷口の手術は、出血量を抑え、筋肉や周辺組織を必要以上に切ることがないので、手術後の回復が早く、感染症などの合併症を減らすことができます。しかし傷口が小さく、複雑な器具を使用するため、執刀医には高い技術が求められます。

ご遺体(献体)を使っての手術手技の実習



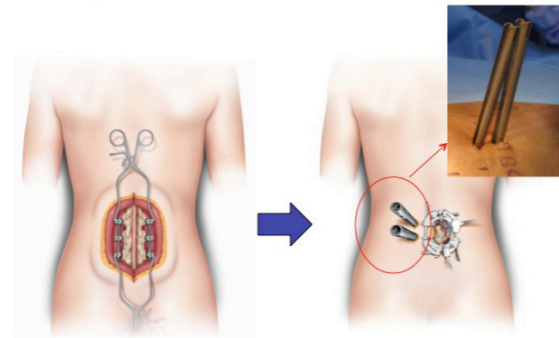
札幌医科大学倫理委員会承認セミナーにて撮影

2日目の24日は、午前8時45分に実習が行われる解剖実習室に講師と受講者が集まり、注意事項などの説明がされた後、ご遺体に黙祷をささげることから始まりました。そして午前9時から今回のセミナーのメインプログラムであるご遺体を使っての手術手技の実習が開始されました。

実習はご遺体を5体使わせていただき、5つのテーブルに分かれ、それぞれのテーブルに講師の先生1名と受講者が3~5名つき、受講者が希望した手技を学ぶというスタイルで実施。時間割は午前が9:00~10:30、10:30~12:00の2シフト、午後は1:00~2:30の1シフト、計3シフトで行われました。複数の手技実習を希望する受講者や、一つの手技を徹底して学ぶことを希望する受講者のため、テーブルを移動しながらの実習でした。午後2時30分に実習が終わると、ご遺体の縫合、器材の片付けをして、3時に黙祷をささげすべてのプログラムが終了しました。

受講者のみなさまは『学び、今後自分の医療に役立てたい』という強い思いで臨んでおられ、なかには、昼食も取らずに実習をする受講者の姿も見られました。講師をされた先生方も、その熱意と気迫に応えるように全力で務められ熱気あふれる実習となりました。

脊椎手術の傷口



従来の手術

MIS
小さい傷口で手術をするため
特殊な機器を用いて金具を挿入します。

画像提供:ジョンソン・エンド・ジョンソン株式会社
デピューシネセス・ジャパン スパイン事業部

脊椎MIS Cadaver Seminar 参加者レポート

平成27年1月23日・24日に札幌医科大学で開催された脊椎MIS Cadaver Seminarに参加しました。今回のキャダバーセミナーでは、著明な脊椎外科の先生方の御指導のもと、実際の手術をシミュレーションした手技を経験することができました。昨今の医療器具や手術方法の日進月歩の発展に伴い、脊椎外科も大きく変わってきております。私自身も学会発表や論文などで新しい知識を吸収するのに伴い、日常の診療のなかで、患者さんに負担の少ない低侵襲の手技が「本来はこの患者さんには適しているのではないか」と考えさせられることもしばしばあります。今回のセミナーでは経験豊富な先生方に陥りやすいポイントからコツまで、私自身が手を動かしながら御教授いただけたことにより、手術を見学させていただくよりも、より鮮明に効果的に学ぶことができました。私にとって今回の経験は、学んだことを患者さんの症状改善のため、より負担が少なく、安全な手術を心がけて日常診療に取り入れるとともに、脊椎外科

医としての自覚の再確認にもなりました。この経験を今後の臨床に活かせるように精進してまいります。

最後に医学教育発展のためにご献体いただきましたみなさまおよびご遺族の方々に、心より感謝申し上げます。また、このような外科医教育の環境をつくっていただいた、札幌医科大学の解剖学教室の先生方、セミナーにあたってご指導、ご協力いただいた先生方にこの場をお借りして御礼申し上げます。

筑波大学医学部整形外科

中山 敬太

平成17年 筑波大学医学専門学群卒業

平成17年 筑波大学附属病院勤務

平成19年 つくばメディカルセンター整形外科入職

平成23年 筑波大学附属病院整形外科入職

平成25年 筑波大学大学院入学

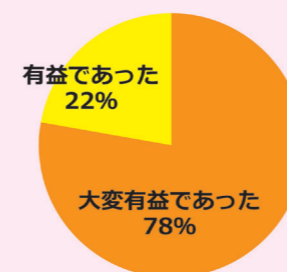


脊椎MIS Cadaver Seminar 参加者アンケート

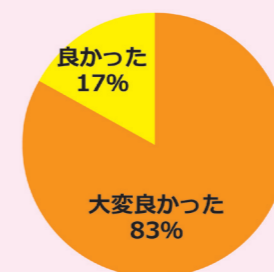
セミナーでは、参加者のみなさまにアンケートへの協力をお願いしました(19名中18名回収)。セミナーの感想とともに、今後のセミナーの参考となる貴重なご意見を頂戴しました。



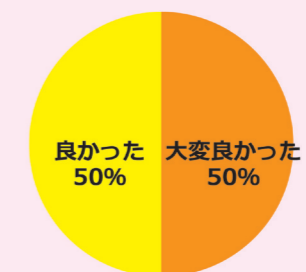
Q:セミナーの有益性



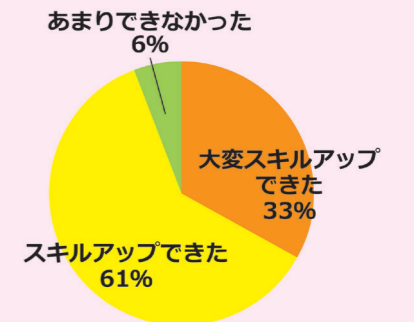
Q:講師の指導



Q:セミナーの構成



Q:手術スキルについて



アンケート結果

セミナーの有益性、講師の指導及びセミナーの構成については、全員から「大変有益であった・有益であった」「大変良かった・良かった」との回答をいただきました。また手術スキルが「大変アップできた・アップできた」との回答も94%あり、今回のセミナーはおおむね良い評価をいただけたのではないかと思います。

ただ初めての開催ということと、設備的に少し不足があったことに対して、「実習の時間が少なくもっと長い時間したかった」、「周辺設備がもっと充実していればさらに良い実習ができるのでは?」、「ご遺体を使っての実習でしかできないことをやりたかった」、「テーブル数に対して参加者が多い」等のご意見をいただきました。いただいた貴重なご意見は、今後開催するセミナーに反映して活かしたいと思っております。